問二 (ア) 4　(イ) 1　(ウ) 2　(エ) 2

【古文の通釈】

ある川のほとりで，狐(きつね)が，魚を食べていた（ちょうどその）ときに，狼(おおかみ)が，ひどく腹をすかせた状態で歩いてきた。（狼が）狐に申すことには，「（お前が食べている）その魚を，（私に）少し分け与えろ。（私の）食料にしよう」と言ったところ，狐が申したことには，「なんと，恐れ多いことだ。私が食べた余りを差し上げることなどできるでしょうか，いや，できません。（あなたは）籠(かご)を一つ，持っていらっしゃってください。魚を捕って差し上げましょう」と言う。狼は，あちこち走り回って，籠を取ってきた。狐が，教えたことには，「この籠を（あなたの）尾に付けて，川の真ん中をお泳ぎになってください。（あなたの）後ろから（私が）魚を追い入れましょう」と言う。狼は，籠を（自分の尾に）括(くく)り付けて，川を下流に向かって泳いだ。狐が，後ろから（籠に）石を入れたので，（籠は）次第に重くなって，（狼は）一歩も引けなくなった。（狼が）狐に申したことには，「魚が入っているのか，予想外に（籠が）重くなって，一歩も引けない」と言う。狐が申したことには，「はい，そうです。予想外に魚が（たくさん）入っているように見えまして，私の力では，（この籠を）引き上げることができませんので，（力の強い）獣を（手伝いに）連れて参りましょう」と言って，陸に上がった。

狐が，辺りの人々に申しますには，「あの辺りの羊を食べた狼が，今まさに，川の中で魚を盗んでおります」と申したところ，（それを聞いた人々は）我先にと走り出し，（川の中で動けずにいる狼を）激しく殴った。

問二 (ア) 4　(イ) 3　(ウ) 2　(エ) 3

【古文の通釈】

これも昔のことであるが，天竺(てんじく)に，体の色は五色で，角の色は白い鹿(しか)が一頭いた。奥深い山にだけ住んでいて，人に知られることはなかった。その山のそばに大きな川があった。その山にまた烏(からす)がいた。この鹿を友として過ごしていた。

ある時，この川に男が一人流れてきて，もう少しで死にそうになっていた。「私を，誰か助けてくれ」と叫ぶと，この鹿は，この叫ぶ声を聞いて，悲しみに耐えられず，川を泳いで近寄って，この男を助けたということだ。男は，命が助かったことを喜んで，手をすり合わせて鹿に向かって言うことには，「どうやって，この恩に報い申し上げるのがよかろうか」と言う。鹿が言うには，「どうやって恩に報いるのがよいか。ただ，この山に，私がいるということを，決して人に言ってはならない。私の体の色は五色である。人が知ったならば，皮をとろうとして，きっと殺されるだろう。このことを恐れるために，このような奥深い山に隠れて，進んでは人に知られないようにしている。それなのに，おまえが叫ぶ声を悲しく思い，自分の行く末も忘れて，助けたのだ」と言ったところ，男は「これは本当にもっともなことだ。決してもらすことはない」と，念を入れて約束して去った。（男は）もとの里に帰って，月日を送ったが，決して人に語らなかった。